

話し上手・聞き上手 三 国 一 朗

私は、今のような、俗に放送タレントといっております仕事をやるようになるための訓練とか、教育とか、そういうものを一切受けておりません。それではなぜそんな仕事をしているのか、という御質問があるとすれば、皆さんの前ですけれども、一にも二にも生活のため、自分が生きていくため、また自分の女房が生きていくため、女房との間に生まれた子供が生きていくため、そのためのまことにせつばつまった家庭の事情によって始めたわけであり、今もなおその事情は継続しているのでございます。

三十の時、私は何をしていたかと申しますと、何もしてなかったのです。御存知かもしれませんが、昔、水木京太さんという、演劇評論家であり劇作家である方がいらした。御本名は七尾嘉太郎で、秋田の横手という所の旧家のお生まれでございます。お嬢さんが七尾伶子さん。放送劇団にもおいでになったし、舞台で女優としても御活躍になっていらっしやいます。その七尾嘉太郎先生と水木京太先生が、戦後『劇場』という雑誌の編集をなさり、私は一時その雑誌のお手伝いをいたしました。

私は、戦争から帰って来たばかり、全く未経験で、一所懸命その

お仕事をさせていただいた当時のことは非常になつかしく思い出に残っております。まだ皆さんがお生まれなっていない昭和二十一年、二年のことです。そこに勤めておりましたが、経営をしている会社の社長とけんかをいたしまして「貴様クビだ」といわれたわけでございます。辞めてしまうと、もう今度は衣食の道に困るわけですが、結婚をいたしましたために、家内が働いて、私は弁当を作ってもらって図書館へ本を読みに行っていたわけでございます。

そうすると飯沢匡先生という方が、当時まだ朝日新聞にお勤めでございました、ふとした事からお見知りいただいたもんですから、「君も、いつまでもブラブラ遊んではいけけない、アサヒビールというビール会社の業務課長がひとり人を雇いたいといっているから、行ってごらんなさい」と御親切に御紹介をいただきました。それでアサヒビールに約十年おりました。たいへん居心地のいい会社でございます。もし私がビールの飲めるたちでしたらもっと居心地がよかったですらうと思うくらいですが、私のように、飲めない人間でも居心地のいい会社でございます。

何をしていたかというと、ダイレクト・メールというのがござい

ますね。あけてみるときれいな印刷物で、なんとなく読んでみたい気になるけれども、読んでいるうちに、なんだ広告だったのかとわかってくる、そういうものが各種ございます。でも、昭和二十六年の初めのことでございますから、まだその分野の発達はめざましくはありませんでした。そこでアサヒビルではその編集をやるような人を常勤の嘱託として採用したいという、それになったわけでございます。で、毎日通いましたけれども、P R雑誌というのもなく、なかおもしろい仕事でございまして、ずいぶんいろんな方にお目にかかりました。

先ほどもちょっとお話いたしましたんですけども、三十で結婚いたしましたして、子供がもう間もなく生まれることになった。一万円と少々の月給をもらっていたんでございますが、ある時家内のいうのには「そろそろ赤ちゃんが生まれます。お産の費用の備えがありませんか」っていうんですよ。そこで私は虚をつかれた思いで、ショックを受けたんですが、つまり家内がお産をすることについては、私はちゃんと覚えがあって、責任を感じているわけです。しかしそのお産にお金がかかるっていうことまで、頭がまわらない。そこで「どのくらいかかるのかね」っていいましたら、家内が「そんなこと、準備するのは夫の務めでしょう」というわけです。

それで私は飯沢先生の所に行きまして、「お産の費用って、いくらぐらいかかるんですか」ってききましたらね、さすがにあきれたような顔をして、「そうね、まあ、人によってさまざまだと思うけれども、どうみたって三万円はいりますよ」。昭和二十七年当時の三万円。約一万円の月給取っている三万円。こりゃまた大変なことになったと思って、目蒲線の奥沢って所の奥に住んでおりました

んですが、目蒲線に乗っちゃあ三万円、目黒で乗りかえしちゃあ三万円、こういうことばかり考えていたんでございます。だんだんお産の日が近づくわけですね。六月の下旬ってお医者さまがおっしゃった。あと三ヵ月。もう途方に暮れておりましたんです。

ところが、東京放送とは当時まだいいなかつたラジオ東京というラジオ局がありまして、昭和二十六年のクリスマスから放送を開始したんですけども、さっぱり聴取率があがらない。商業放送ですから、聴取率があがらないと、スポンサーの会社がみんなおりてしまいますから一大事。なんとかしなくちゃいけないというところで苦心さんたん、無い知恵をしぼって始めようとしたのが深夜放送です。当時は放送っていうものは十一時すぎにパタッと終ってしまつてあとは朝まで何にもしなかつたもんなんでございます。その間の空白状態を一時間でも二時間でも深夜放送で延長して、NHKを聞いてた人も他にないから聞いてみようかってんで、それをお聞きになる。そのうち昼の方も聞いて下さつて、聴取率もあがるだろうってことで、これが一縷の望みです。そこで深夜放送を始めることになったんですが、深夜放送をだれにやらせるっていうことメドがつかない。今でしたら終夜放送などもやりたいっていう人が一杯いらっしゃいます。ところが当時は深夜に放送をするなどということは大変いかがわしいことだつたわけです。第一に安眠妨害である。社会の安寧秩序を乱す行為であつて、賛否ごもごもです。

ラジオ東京へ、時々コマージュの用事やなんかで行つてみますと、みんな困っているんですね。深夜放送をやりたいと思つただけけれどもやり手がないというお話なんです。いつもでしたらそんな話聞き流してしまつてくれれば、なんせ三万円、三万円でしたか

らこの仕事をもしやるとどれくらいもらえるもんだろうかと思つたわけですね。早速係の方にそれとなく打診してみたわけです。「深夜放送やる人決まりましたか?」「いや、決まらない」。まさか、私がやりたいとはいえませんが「私も心掛けてますけれど、なかなかありませんね。夜中に働く人はね」なんていってたんですけれども、心の中はやりたい気持ちで一杯なんです。

ある時「その、大体いくらくらいで、深夜放送の担当者をお雇いになる予定ですか?」ってききましたら「なんせ深夜のことだから充分のことはしたいと思うけれども、初めての試みでもあるしね」などとなかなか渋つていわないわけですね。で、根掘り葉掘りいろいろ聞いてみると、一晚一時間半。十一時半から一時まで、生放送でいわゆるD・Jっていうやつをやるわけです。一時間半レコードの解説をアメリカ人と二人でやってもらう。アメリカ人は英語をしゃべり、日本人は日本語をしゃべるっていう風に二人でやってもらうけれども、一晚一時間半で千円ぐらい。当時私は、なんせ三万円の時ですからソロバンをはじいたわけですね。四月からやるつていつてるから、四、五、六と六月の末ごろまでに三万円入れりゃいい。一晚で千円くれるんだから三十回やりゃいいんです。一日おきでも五月いっぱいあればいい。少しくらい休みをとっても六月。絶対間に合う。そこで「いかがでしょう、私にやらせて頂けませんでしょうか」といいましたら、ダメだと思いきや「やってくれるか、助かったあ」っていうんですわ。それくらい人がいなくなつたんですね。それで私、聞いたんです。「だけど、お宅にアナウンサーはいらっしゃるじゃないですか」。そうしたら「とんでもない」っていうんです。そのラジオ東京の係の方が「あなた方どう思ってるか知らな

いけど、アナウンサーってものは、放送局の宝ですよ」(笑) 本当です。そういいましたよ。ダイヤモンドかサファイヤかくらい。(笑) とにかく、東京で初めての民間放送局でアナウンサーを探して来るってことはよそからスカウトして来るってことでしよう。多少有望な人を養成するにしても、すぐには使えないものにならない。NHKからスカウトしたり、外地でやってた人を集めたりして、ようやく人員を固めたわけですから。その宝石のような存在のアナウンサーに、深夜の仕事させるなんてことはできませんよ。「あなたはお見受けしたところ、非常に丈夫らしいから」(笑) なんだって、体が頑丈でなきやダメ。「体だけは自信あります」。「そうか、よかった」っていうわけですね。それで開始したんです。

夜中の一時すぎではタクシーで帰らなきやならない。交通費がかかって結局一日分で七百円ぐらいしかならないんですね。それでもなんとかやれば三万円にはなるわけです。とにかく三万円が出来たらやめようと思つたわけですね。で、三万円ようやくできて六月末にかつかつ生まれたのが今二十六だか七だかになっている息子でございます。とにかく子供の年をいうと私の放送年令がわかり、私の放送年令をいえば子供の年がわかるってことになってるんです。

一年たつたらやめよう、そう思つていても仕事というものは一べんやり始めたら最後。そういうものです。ですから皆さんも仕事をおはじめになる時は、もしまかりまちがつてこの仕事が一生涯の仕事になつても自分は悔いるところがないか。それをお考えになつて、決心がついたらおはじめになつて下さい。現に私を見て下さい。私は三万円できたらずもりだつたんです。四、五、六の三ヵ月。会社に朝九時から五時までつとめて、それから深夜放送やってたん

ですから、長続きするはずないんです、本当は。ところがやってみるとつい八年九ヶ月。そのうちにテレビが始まったわけですね。

昭和二十七年の四月から、私はラジオでやっておりましたが、昭和二十八年の九月から、私はじめての民間のテレビがはじまりました。いま市ヶ谷に日本テレビってありましょ。すばらしく大きな高層ビルに建て直りましたけれども、なぜあんな大げさなことやったかっていうと今年で二十五年になるわけですね。二十八年の九月に民間のテレビがはじまって私のつとめておりますビール会社が番組を提供することになったわけです。放送日の土曜日になりますと、会社の倉庫からビール、サイダー、オレンジジュースなどをもちだして、手押し車に乗せてそのままタクシーに乗って日本テレビで降りて、スタジオに飾る。番組がすみますと御出場下すった一般のお客様にどうぞ御愛用くださいましてさしあげてお帰りいただく。こういう風というのが私の役目なのです(笑)。

そうしておりますうちに、テレビの司会者っていう仕事は横で見ても大変気の毒だと思いました。こういうことはするもんじゃないなと思っただんですよ。どうしてかといいますと、八月とか九月はまだ暑いところもあってきて、もうライトがカッカッ、カッカッとついで、その汗たるや大変なものです。暑そうだし、時間に追いまられてつらそうだなあ、気の毒だなあ、と思っただんです。そしたら初代の司会者の志村さん——残念にもお亡くなりになりましたが——「大変うまい司会者が三ヶ月で「やめる」って言うんですね。「どうしておやめになるんですか」と聞きますとね、「暑いよ」っていう。(笑)つまりテレビの司会者が暑いからやめるっていう。これは日本テレビの歴史にも民間放送史にも書いてない。当初の司会者

は、ただただ、暑いためにやめたという(笑)。このことは、やっぱり歴史に残しておいた方がいい。その他に、出演料が安いとか、CMがいろいろあつて覚えきれないとかあつたんですけれどもね、とにかく暑い。身体がもたん。やめる。本当に、やめちゃいました。

そのため私は、非常に困って、課長に「どうしましょ、どうしましょ」って責めたてたんです。来週からかわるんですが、課長はちつともあわてた顔しないんですね。「あっそう」「あっそう」っていつてるだけなんです。それで、いよいよ「今日は本当に決めてもらわないと困るんだ」っていいましたらね、いつもとちがった目つきで、あたしを見ましてね(笑)。「君、困る、困るっていうけれどね、僕、ちつとも困らない」(笑)。「どうしてですか」

「裏方の仕事があるんだから、とでもできません」って「そんなこといって、知ってるよ、僕は」っていうんです。「深夜放送やってるじゃないか」。会社員ってのは、そんな夜中まで起きてると思わなかつたんです(笑)。それで会社に務めている間だけと思っただんですけれども、日本テレビが二十五年たつてもまだ私テレビの仕事をやめないですからね。四半世紀やってるわけです。

さきほどお話しした深夜放送のD・J番組は、ただ曲名の紹介をするだけでしたけれども、人様の話を聞き出す仕事は、ラジオ、テレビを聞いたり見たりしている方たちの代わりになって聞くということですね。それを始めるようになりましたのは「私の昭和史」という番組からで、東京12チャンネルが始った時から十年ばかり続けてやつたことがあるんです。今年、12チャンネルの十五周年ですが、最初の年から十年間、毎週一回ずつその「私の昭和史」と

いろいろな経験をなさった人に、昭和の歴史のひとコマを語っていただくんですが、私が聞き役になるわけです。それをやりますうちに、だんだん人の話を聞くことの楽しさ、同時に難しさもわかるようになって来ました。それを十年間で五百十八回放送をいたしまして、だいたい八百人以上のかたにお目にかかって、聞き手を勤めたわけです。その中の大勢の方々がおなくなりになりましたけれども、いい経験だったと思っています。

よく「話し上手は聞き上手」ということをいいますけれども、こだけのお話ですが、聞き手はやっぱりつらいもんです。話している人っていうのは、どういうわけか話し出したら、やめないんです。自分のことを話し出したら、やめない。いい気持ちらしいんです。現在私も、いい気持ちですけれども、自分だけがいい気持ちでね、聞いてる方はちっともいい気持ちじゃない。話し上手っていうのは、往々にして人迷惑なんです。ですから、話し上手になるよりは、聞き上手になった方が、社会のためになるんじゃないか。

私としては、なるべく人様のお話を聞く。しかしただ黙って聞いてたんじゃ相手はしゃべりやしません。時々刺激してあげないとお話が出てこない。どうやって刺激するかというと、別にピンでつつかなくてもいいんですが、その刺激が話したいという気持ちにさせる。そうだと話を話しておこう、あれを話しておこう、ここはこういう風に詳しく話さないか聞いてる人もわからないのではないだろうか。そういうふうを考えさせる刺激が大事なんです。

聞き手の方は言いたい気持ちをおさえて、じっと相手の人の目を見てほしいわけです。そうすると「あの人は聞いているな。いいんだ、もしかしたら私にはほれているかもしれない」。そうするといくら

でも話したくなる。聞いていまして、出がよくなってきたな、と思う。そのへんが私の職業の醍醐味ですね。そのうちに、今度は意地悪するんです。出あしのよくなってきたところをピシッとおさえる。向こうがどんどんしゃべるのを、ときどきキュッ、キュッ、キュッと、止めてみてごらんない。ちゃんとうまくいきます。相手の人が、もう少ししゃべりたかったな、というくらいでやめさせるのがいいんで、今日はおもう本当に気持ちよく話した、というのは、しゃべり過ぎなわけです。私、放送をあつと聞いてみますけれども、足りなかったかな、と思うくらいでちょうどいいですね。「過ぎたるはおよばざるがごとし」とはこのことだと思えます。

今は女性でも男性でも、話がうまい。だからこれ以上話し上手になるよりは、聞き上手になった方がいいですね。聞く時には、さア私、聞かせていただきます、ではだめです。じつとがまんして聞いていると、私の話つまんないのかしら、私の話では不足なのかしら、とそう思わせて、これでもかこれでもかと話す気させる。それで少しボルテージが上がってきたなと思った時に、ゆっくりしてやるわけです。「そうですか……」そうすると、ハッと我にかえる。またそこでいろいろな反証をあげて突っこんでみると、話す筋道が通ってくるわけです。私が聞いているのではなく、聴取者の方が聞いてらっしゃるわけだから、私はそこで、けしかけたり、手綱を引いたりしていればよいわけです、ゆるめたり、ひきしめたりしていけば、話は非常にうまくいくだろうと思うわけです。

ぜひ次の機会には、今度は私が聞き手になって、皆さんからお話を聞きたいと思っております。

(文芸学会講演の一部を筆記) 西岡初美、根本英美子ほか